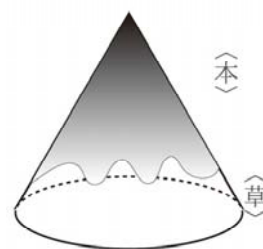


第5回 和本の楽しみ方3 書物と演劇

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



〈本〉と〈草〉という考え方

平安時代の書物は、仏典（経文や教理）や公家の記録、勅撰の和歌集などが主で、基本的に卷子に仕立て、和歌以外は漢文で書かれていた。それに対して仮名の物語は一段低いものとみなされてきたが、自由さがあったので冊子＝草子（草紙）に仕立てた。

この関係が〈本〉と〈草〉である。

〈本〉とは本物、本格、本来、根本と「大木の根本」といった意味である。それにたいして〈草〉とは、野原の草のように、格下、本式でないことで、今でも草野球・草競馬というように使う。この関係は、該当する書物こそ変わるが、つねにいつの時代にもあった。それは、たんに格上と格下があっただけでなく、そこにこそ日本の「書物」のもつ本質が隠されている。

中世における〈本〉と〈草〉は？

中世の寺院はピラミッドの上部に僧侶がおり、学問の中心を形成していた。それが中世の〈本〉のカテゴリーを支配していた書物である。漢籍や医学書などもつくられたが、圧倒的に仏典なのである。

文学においても平安時代の物語は古典として格上げされ、〈本〉の側に入った。中世の『徒然草』『方丈記』などの随筆、『古事談』（説話集）『梁塵抄』（平安末期の歌謡集）なども〈本〉として扱われた。

それに対して、新たに成り立った中世の物語の世界が存在していて、それが〈草〉の位置になった。

このように〈本〉と〈草〉は、「位相」を変える。書物はボリュームを増やしながら内部で、このような「位相」を変える運動をしており、〈本〉と〈草〉の相対的な関係やその境界のあり方を変えていく。これは江戸時代までダイナミックに続く。今回はその中世における〈草〉の側を見ていく。

絵巻は上等な作りで高価である。上流の子女向けだが、書物としては「草紙」の一形態である。

強大な寺院

中世の特徴は、武家政権の成立でもあるが、それ以上に社会の内部で寺院や神社の力が大きかった。寺社勢力といった。

京都・奈良など近畿地方全体には、強大な寺院や神社がいくつもあり、内部はピラミッド型の権力構造になっていた。その頂点に学侶と呼ばれるエリートいて、その下に武家出身の一般僧がいてここまでを僧侶といった。

中世の僧侶はよく勉強していた。武士は権力を握ったが文化への貢献度は低い。公家も落ちぶれて、余裕がない中で、寺院は勉学の場として、研究書の執筆もさることながら、書物の保存においても大きな役割をはたしたのだ。

下層民、遊芸者

その下に多数の大衆などと呼ばれた層が寺院の形成する都市周辺に集まって住んでいた。外見は僧服をまとった僧形をしていたが、実態は下働きか、商工業をする者だった。本づくりをする職人となっていた経師もこの層に属する。

さらにこの寺社に出入りする聖や神人と呼ばれる下層の者がいた。彼らは寺社の保護下にあった放浪民であり、商人でもあり芸能者でもあった。

たとえば、琵琶を弾きながら『平家物語』を弾き語りした（＝平曲）琵琶法師といわれる盲

目の芸能民、白拍子しらびょうし（男装する女性芸能者）、教を絵解きしながら説いていく歩き巫女みこなどがいた。

この芸能者の特徴は、寺社に隷属する一方、特権も与えられていて各地を放浪して、日用の糧を得ていた。中世の寺社はしだいに民衆教化、救済に向かっておりその末端を担った。

本地物、説経節

この民衆教化の語りを説経せつきょうとか唱導しょうどうといった。唱導がより俗化していくと、仏教の教理より寺社の縁起や神仏ほんじの靈験を物語にするようになった。これを本地物ほんじぶつといった。中世の本地垂迹ちいじやくからきており、仏・菩薩ぼつぼつが衆生しゅじょうを救うために姿を変えて現れた神が靈験あらたかであることを民衆に語るものである。南北朝時代には成立したといわれている。

『さんせう太夫』（安寿と厨子王）は丹後の金焼地蔵の本地物だし四天王寺と清水観音が関係する。

このような話を下級の陰陽師おんみょうじである声聞師しよもんじや修験者しゅげんじや（山伏）などの遊芸民が哀感をこめて鉦などを鳴らし舞を踊りしながら各地を回ったのを説経節せつきょうせつといった。

室町時代末期に三味線が普及すると芸域が広がり、浄瑠璃じやうるりを生んだ。それが江戸時代にも広がった。

一方、白拍子による曲舞から出た幸若舞きやくわぶ、興福寺などの猿楽から発展した能のうも寺社末端の芸能だったが、室町時代から上級の武士に支持されて、江戸時代も幕府の式楽しきらくになった。ただし能は盛んになったが幸若は滅びた。



「唱導文学」は書物ではないが？

当初、これらが文字として残ることはまれだった。文字による原作があって、それを元に作品にしていたのではなく、遊芸民たちの語り物が先なので、文字化はずっと遅れた。テキストとして読めるようになるには、室町時代の末期から、ほとんどが近世に入ってからである。→江戸時代になって印刷された本地物『しゃかの御本地』
こうして残ったを物語を今日「お伽草子」といっている。500種くらいが知られているが、実際はもっと多かっただろう。



物語のほんとうの「おもしろさ」とは

中世における〈本〉と〈草〉は、書物だけ見ると〈本〉の側の圧倒的な質量となる。〈草〉はまだことが目的で、場中心で書物化されていないものが多いし、お伽草子 500 種といっても10万点はあるという〈本〉にはかなわない。〈草〉は三角形の底辺に薄く存在した形だ。それだけを取り上げると書物にとって中世は文学にとって「暗黒時代」だったように見受けられる。しかし、それは紙に書かれて綴じられたものだけが書物という概念にとらわれている見方である。物語などの中身をコンテンツと今風にいえば、中世は書物の中には少ないが、語りの中で熱く成長していた。演劇を通して物語を享受していた人の数は、僧侶の数よりずっと多い。

日本の中世における「おもしろさ」とは、中世における〈本〉と〈草〉は、書物だけ見ると〈本〉の側の圧倒的な質量となる。〈草〉はまだことが目的で、場中心で書物化されていないものが多いし、お伽草子 500 種といっても10万点はあるという〈本〉にはかなわない。〈草〉は三角形の底辺に薄く存在した形だ。それだけを取り上げると書物にとって中世は文学にとって「暗黒時代」だったように見受けられる。しかし、それは紙に書かれて綴じられたものだけが書物という概念にとらわれている見方である。物語などの中身をコンテンツと今風にいえば、中世は書物の中には少ないが、語りの中で熱く成長していた。演劇を通して物語を享受していた人の数は、僧侶の数よりずっと多い。

日本の〈草〉の分野は、広義の演劇と深い関係にある。江戸時代になると中世的な流浪の芸能はしだいに定住化して劇場での演劇が盛んになるが、それでも草紙と演劇は深い関係

にあった。むしろ、相互に補完する関係であった。

絵巻に見られたように、物語は絵を伴うことでイメージが膨らんだ。そこには、身体性もあった。ただ詞を黙読するだけでは味わえないものだ。想像力の豊かさが伴うことで、より多くの支持を受けた。

中世の演劇は、この身体性の中に「演ずる」という動作、音（せりふや語り、かねや太鼓の音など）を加えることで、聴衆のイメージをより鮮明にした。そこにあるのは、物語の本当の「おもしろさ」を結実させたことではないか。

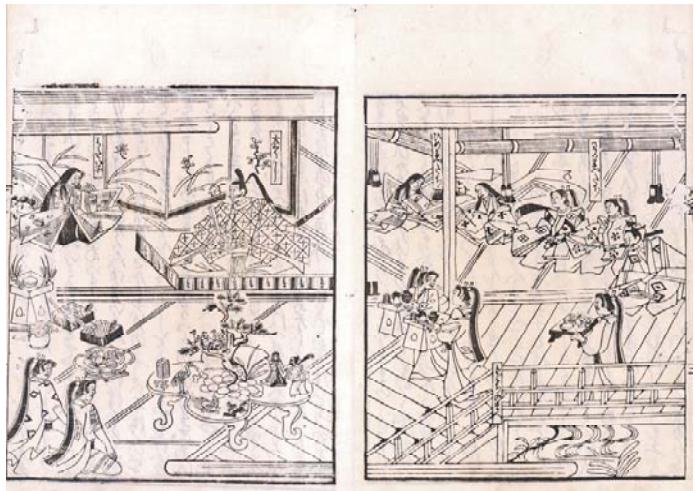
紙に書かれた文字＝書物でない世界の本質がそこにあった。あるいは、逆に、紙にかかれなくとも存在しうる書物があった、ともいえないか。

江戸時代に通じる中世

中世の演劇は、いわば大道芸。江戸の歌舞伎のような衣裳や背景をリアルにするほど発展はしていなかったが、それでも人々を楽しませた。そこには、長期にわたって磨き上げた技もあった。だから、江戸時代になってもまだ人気があった。

ただ、しだいに浄瑠璃や歌舞伎、あるいは能・狂言のように演劇に特化していく。

一方、読みやすい文字に挿絵を入れた本が江戸時代にたくさんできるようになった。中世の物語はテキスト化されて本で読むようになるのだ。



↑ お伽草子の代表作『文正の草紙』の挿絵。

奈良絵本

江戸時代は中世文化の集大成でもあった。朝廷の貴族である公家(くげ)や武家の書物は戦国時代の間はかなり散逸してしまっただが、寺院の書物の多くは残されたし(ただし信長に焼かれた延暦寺、秀吉に攻められた根来寺では古い書物や文書も焼かれた)、新たな手書きの写本も書かれたうえ、仏典や歴史書、漢籍の多くが印刷されるようになった。

その中でも細密な極彩色の絵と美しい仮名文字で構成された物語の豪華な写本ができた。これを奈良絵本というが、そのピークは江戸時代の17世紀後半である。これは上流の息女のための嫁入り道具でもあった。題材はほとんどが古典の物語絵巻かお伽草紙の絵入本である。江戸時代は中世を堪能したといってもよい。

講義の要旨はpdfにするので、各自がダウンロードすること。

http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/

質問は、専用メールでいつでも。 khashi@s.email.ne.jp

参考文献

- 橋口侯之介『和本への招待』2011、角川選書 第五章
- 徳田和夫編『お伽草子事典』2002、東京堂出版
- 徳田和夫編『お伽草子百花繚乱』2008、笠間書院